Safety Assurance News

2015　No, 1

島田病院医療安全管理委員会が送る

患者さまと職員の安全に関するニュース

特集

薬物アレルギーに対する当院での取り組み

FRONT ESSAY

薬物アレルギーとは？

FRONT ESSAY

FRONT ESSAY

薬物アレルギーとは？

人間には、自分の細胞と外から侵入した異物とを区別し、異物を排除しようとする免疫機能が備わっています。この免疫機能が過度に反応すると、時には人体にとって有害な症状を起こします。これをアレルギーといいます。原因となる物質（アレルゲン）はダニ、花粉、ペットの毛、食物など様々ですが、薬も人によってはアレルゲンとなる場合があります。

◆薬物アレルギーの症状

薬物アレルギーの症状は様々です。多彩な症状の中には、薬を服用して直ちに生ずるアナフィラキシー反応（鼻汁、呼吸困難、頻脈、血圧低下、腹痛、下痢、嘔吐、全身紅潮や蕁麻疹、ひどいとショック状態となります）や蕁麻疹もあれば、数時間以上してから遅れて出てくる症状、あるいはしばらくの間服用を続けるうちに生じてくる症状もあります。最も頻度が高いのが皮膚症状です。薬の投与後 10～30 分以内に症状が出現することが多く、蕁麻疹や血管浮腫がみられる即時型アレルギー、投与数時間から 2 日以内に紅色のぶつぶつした皮疹が全身にみられたり、紅い斑点が身体の一部から次第に全身に広がっていったりする遅延型アレルギーがあります。重症の遅延型薬疹では、高熱とともに紅斑の上に水疱を形成し、眼や口唇・口腔粘膜にも炎症を生じます。

◆薬物アレルギーを起こしやすい薬

抗生剤、消炎鎮痛薬、感冒薬、抗けいれん薬、痛風治療薬によるものが多くみられ、重症型も多くはこれらの薬が原因となります。抗生剤ではペニシリン系やセフェム系によるものが即時型、遅延型ともに多くみられますが、マクロライド系やテトラサイクリン系の抗生剤やサルファ剤、抗結核薬も薬疹を生じます。それらに次いで、造影剤、高血圧治療薬、糖尿病治療薬、抗腫瘍薬、関節リウマチ治療薬による薬疹がみられます。薬以外にドリンク剤やサプリメントもアレルギーを起こすことがあります。

◆アナフィラキシーの治療

アナフィラキシー反応に対してはアドレナリンの筋肉注射や副腎皮質ステロイド薬の点滴等の治療を行います。過去に重篤なアナフィラキシーが起きたことのある人は、緊急時に備えてアドレナリン自己注射剤（エピペン：アナフィラキシー自己注射剤）を常に携帯していることもあります。アナフィラキシー補助治療剤は症状の進行を一時的に緩和させ、ショックを防ぐための自己注射剤です。あくまでも補助治療剤なので、アナフィラキシーを根本的に治療するものではありません。エピペン注射後は直ちに医師による診察を受ける必要があります。

参考：日本アレルギー学会、ファイザー製薬 HP、中外製薬 HP

当院での取りくみ

当院では、受診前に薬物アレルギーの既往を確認し、その有無を電子カルテの患者情報で各職種が情報共有できるようにしています。
たとえば、ペニシリン系抗生剤で薬物アレルギーがある場合は、同じβラクタム環の構造をもつセフェム系抗生剤でもアレルギーを起こす場合があるため、過去の服用歴を確認し、避けた方がいいと判断される薬を禁忌薬剤として登録しています。（図 1）

図 1

禁忌薬剤に登録すると、カルテを開いた初期画面に禁忌マーク（図 2　赤丸部分）が表示されます。他に食品アレルギーがある場合も、禁止食品が登録されていると禁忌マークが表示されます。禁忌マークをクリックするとアレルギー情報が表示され内容の確認ができます。（図 3）万が一、誤って医師が禁忌薬剤を処方した場合、警告（図 4）が表示され、処方された薬剤が禁忌薬剤であることがわかり、処方されるのを防ぐことができます。

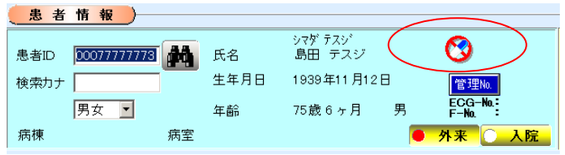

図 2

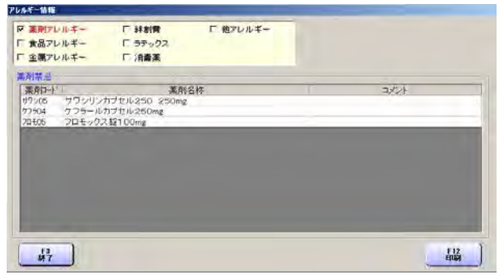

図 3

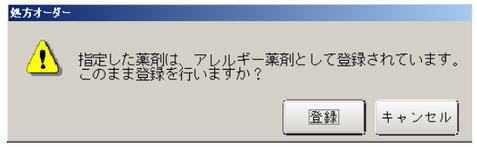

図 4

薬物アレルギーや薬による副作用の既往についての詳細な問診はとても重要であるため、それを活かし、今後も再発防止に取り組んでいきたいと思います。

薬剤課　伊藤

Safety Assurance News

次号は 9 月です！

発行人　医療安全管理委員会　編集担当　森下　幸子

発行所　医療法人永広会島田病院内